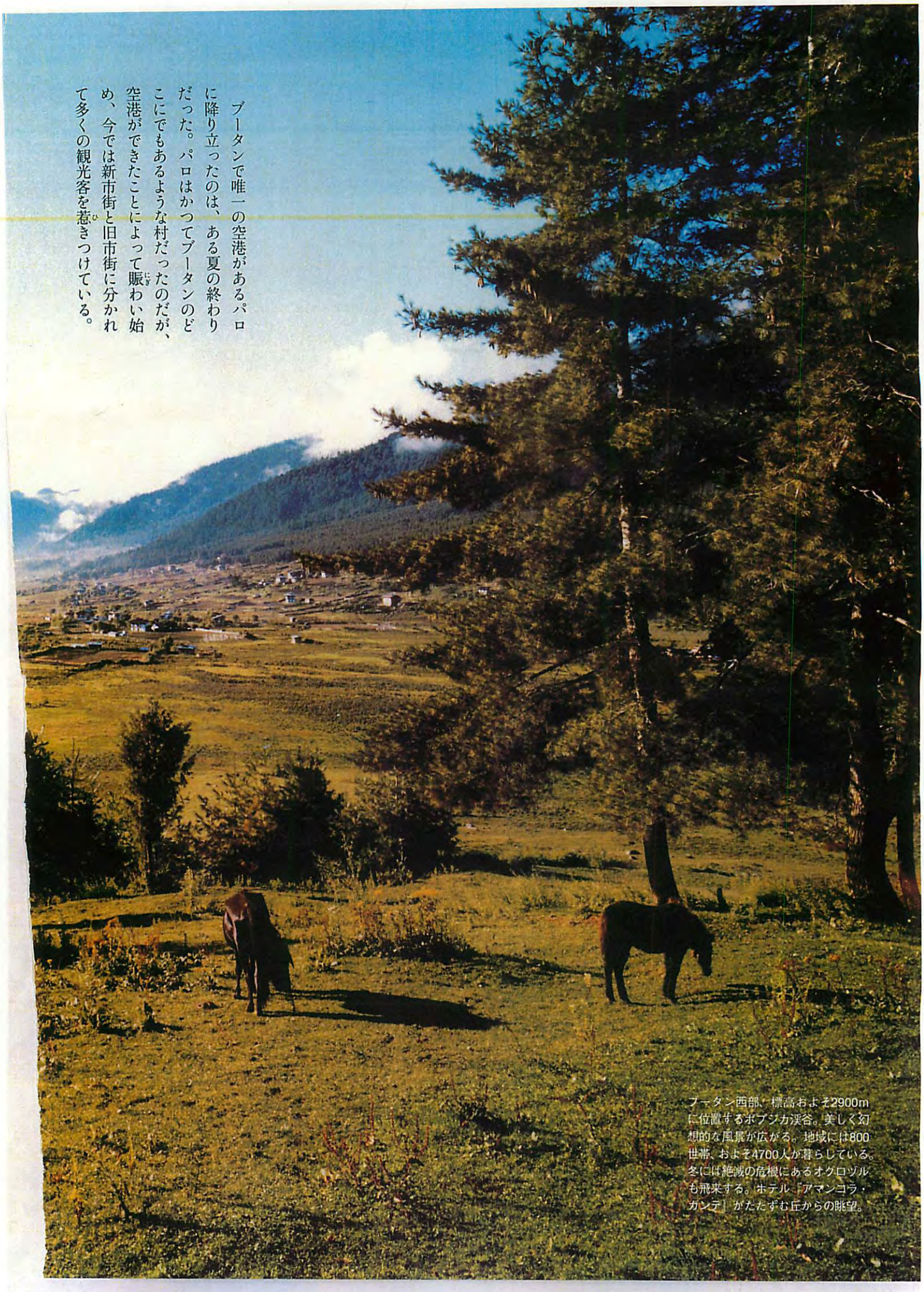
ブータン　信仰と自然とともに

BHUTAN

ヒマラヤ山脈の南側に位置し、国土のおよそ70パーセントを森が占めるブータン。
手つかずの自然、仏教と密接に結びついた人々の暮らしを訪ね、
パロから首都ティンプー、そして東へ。写真家・石川直樹が独自の視点で巡る旅。

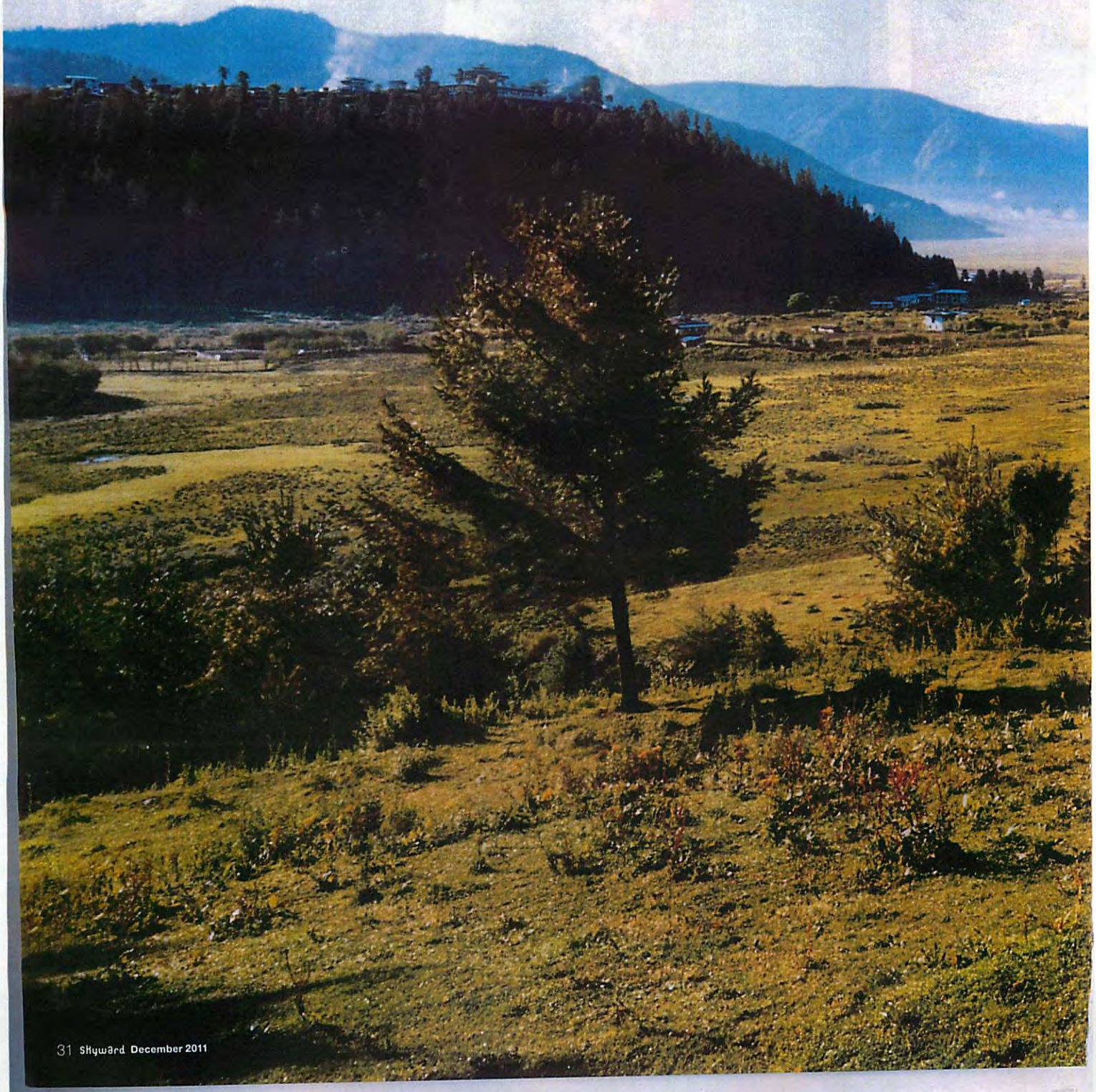
撮影と文・石川直樹
photographs & text by Naoki Ishikawa



ブータンで唯一の空港があるパロに降り立ったのは、ある夏の終わりだった。パロはかつてブータンのどこにでもあるような村だったのだが、空港ができたことによって賑わい始め、今では新市街と旧市街に分かれて多くの観光客を惹きつけている。

ブータン西部、標高およそ2900mに位置するボプジカ渓谷。美しく幻想的な風景が広がる。地域には800世帯、およそ4700人が暮らしている。冬には絶滅の危機にあるオグロヅルも飛来する。ホテル「アマンコラ・ガンテ」がたたずむ丘からの眺望。

パロ空港にはホテル『アマンコラ』専属のガイドのツェリンと、ドライバーのペンツォが待っていた。ぼくはだいぶ前からブータンに興味をもって訪問の機会をうかがっていたのだが、独特の観光制度によって、なかなか気軽に立ち寄ることができなかった。まず、観光客がこの地を旅するためには、ガイドとドライバーの同行が義務づけられている。つまり、ひとりで自由旅行をすることはできず、一日200ドルの公定料金を旅行会社に支払って、ホテル・ガイド・ドライバーなどの手配をあらかじめしてもらわなければならない。一人旅特有の煩雑な手間がいらないという意味では便利な制度かもしれないが、逆に、宿を自ら探して泊まり歩くような移動は不可能となる。そんなわけで、ふらっと立ち寄るということがなかなかできずにいたのだが、もはや自分の旅の虫がおさまらず、ついに念願のブータン行きが実現することとなった。

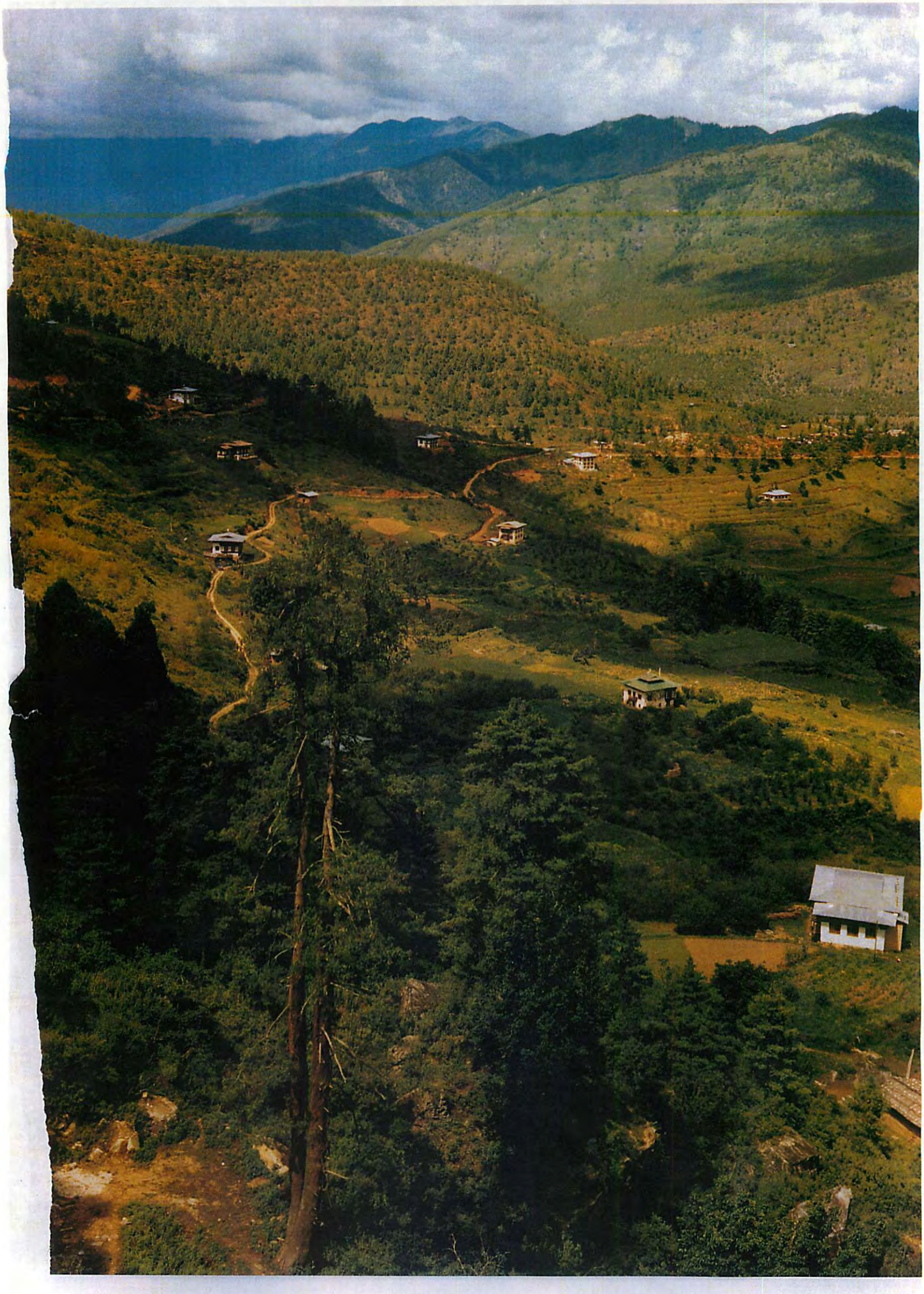


ポブジカ渓谷でいちばん古い村といわれるゲラ村の民家にて。台所や寝室、リビングのほか、祈りの部屋があり、その家独自のスタイルでさまざまな装飾が施されている。

面をつけて舞うブータンの伝統の踊り。『アマンコラ・パロ』にて。上は、パロのメインストリート。通り沿いに日用品や土産店などが立ち並ぶ。車が行き交い、人通りも多い。

17世紀の終わりに建てられた、絶壁にたたずむタクツァン僧院。上は、ティンプーのデチェン・ポダンにて。歌手のオーディションのテレビ番組を真剣な眼差しで観ていた。

ポプジカ渓谷のコミュニティスクールにて。上は、ローカルレストランでの夕食。ドライビーフとチリの煮込み、レッドライス、ソバ粉のパンケーキなど。左は、散髪していた親子。



ブータン中央部、ブムタンのタルパリン僧院にて。早朝、神聖な時間が流れていた。右は、旅の途中に出合った風景。連なる山々を縫うように道が延び、ぽつぽつと民家が建つ。

PARO » THIMPHU

パロ→ティンプー

空港に来てくれたガイドもドライバーも、「ゴ」と呼ばれる揃いの伝統衣装を着用し、身だしなみも整っていて、好感がもてた。彼らに案内されるままに車に乗り込み、美しい水をたたえたパロ川沿いを2時間ほど走ると、首都ティンプーに到着した。街はパロよりも雑多な印象で、人も多い。街の郊外にひっそりとたたずむホテルに荷物を置いて、早速街に出てみることにした。

初めての土地はいたるところに新鮮な驚きがあって嬉しい。まずは伝統医療院に立ち寄り、女医に診察を受けるところからブータンの散策は始まった。医者はぼくの脈をとりながら、「寝不足でしょう」と言う。当たっている。出発前は忙しくて、ロクに睡眠をとっていなかったのは事実だが、果たしてそのことを脈から知ることができるのだろうか。ブータンはこうした伝統医療と、私たちが慣れ親しんだ西洋医療とが対立し合うことなく受け入れられている大らかな土地である。

伝統医療院の近くに、国立工芸学校があった。ブータンの芸大ともいうべき教育施設で、15歳から20歳の生徒が寮に寝泊まりしながら美術を学んでいる。絵画や彫刻などの学科が設置されているが、そのすべては仏教美術に収斂(しゅうれん)していく。ブータンには寺や僧院がいたるところにあり、その建築の装飾や安置された仏像の美しさには毎回目を奪われた。総じて洗練された仏教美術がこの地に根付いたのは、4年から6年という比較的長期間、こうした学校でみっちりと基礎を教えていることも理由のひとつだろう。

学校を訪ねた時、彫刻を学んでいるというまだ10代らしき男子生徒と出会った。彼は日本のアニメ『DEATH NOTE』のTシャツを着ており、坊主頭が伸びてしまったような髪型をして、はにかみながら訥々(とつとつ)と学校の説明をしてくれた。彼の案内で、禁断の男子寮に入らせてもらう。薄暗い部屋の中にはおんぼろの2段ベッドが所狭しと置かれ、壁には落書きがしてある。若い男の汗臭い匂いが充満していて、青春を絵に描いたような寮だった。

ブータンの学校は、こうした専門技術を学ぶ通常の学舎ばかりではない。あちこちに点在する僧院もまた、学校の役割を果たしている。雨が降りしきるなか、次にデチェン・ポダンという僧院を見学させてもらった。木造の建物の中にいたのは赤い袈裟(けさ)を着た10歳から20歳の少年僧たちで、皆が皆、テレビにかじりついていた。素人が歌手を目指すオーディション番組の決勝戦を放映しているらしく、そこに注がれる無数の眼差(まなざ)しは真剣そのものである。マイクを持ってしんみりと歌っているテレビの中の彼女は、いつかブータンの人気歌手に上り詰めていくのだろうか。テレビに釘(くぎ)付けになった少年僧のなかには孤児もいて、本当に小さな男の子から青年になりかけの若者まで、幅広い層の子供たちが受け入れられているのがわかる。

僧院を出て、街の中心部にある市場へと向かった。地元の人が野菜や果物を売り買いしているブータン最古の市場で、八百屋やスーパーマーケットらしき店が見当たらないブー

上から、ティンプーの伝統工芸の学校ゾリン・チョゾムで学ぶ生徒たち。寺院の装飾画を描く職人。ティンプーの市場、サブジ・バザールにて。ブータンの食に欠かせないトウガラシ、秋の味覚の大きな松茸も。ガンテに向かう途中、立ち寄った村にて。

タンでは、市場が台所と直結するオープンスペースとなっている。ワラビなどの山菜をはじめ、あらゆる野菜や果物が並んでいた。

市場での最大の収穫は、ビニール袋に入った大量の巨大松茸である。拳大の松茸が8本入って、300ヌルタム、およそ500円。しかも、喜び勇んで松茸の前でガイドとおしゃべりをしていたら、買うのをためらっていると売り子の女性に勘違いされ、300ヌルタムを270ヌルタムにまけてもらった。これを日本で買ったら10倍以上の値段になるだろう。

市場で松茸やスモモなどを買い込んだ後、民族衣装である「ゴ」を手に入れるべく、衣料品店に入ることにした。

ゴは、着物とガウンを足して2で割ったような服装で、ブータンにおける正装である。ゴの下にはテュゴと呼ばれる白い襦袢を着用する。帯で留めるのは着物と同じだが、裾を膝上まで上げて帯で留めるのがブータン式である。しかも、お尻のあたりのひだをきれいにふたつ付ける必要があり、慣れないとひとりで着るのは難しい。店の人なのか、お客として来ていた人なのかわからないが、ガタイのいいおじさんが、そそくさとぼくにゴを着せてくれた。ゴの柄はストライプやチェック、モノトーンなどがあり、特にチェック柄の色の組み合わせは絶妙だった。日本でこの柄のネルシャツが売っていたら、ぼくはすぐに購入するだろう。

ズボンを脱いでゴを着ると、股に空気が入って気持ちがいい。スカートをはいた女子の気持ちが少しだけわかった気になる。

夕方になると肌寒いティンプーだが、白襦袢+ゴという組み合わせは、暑くもなく寒くもなく、大変心地いい。セットで購入して5000円ちょっとだったが、ゴの生地は厚く、決して安い作りではないので、満足している。ちなみに女性は「キラ」という服が正装で、こちらも選ぶのが大変なほど可愛らしい柄が店先に並んでいた。

夜、市場で買ってきた松茸をホテルで調理してもらった。焼いた松茸にライムをたらして、わずかに塩をつけて食べるだけなのだが、大変に美味である。レッドパンダビールという、酵母が効いためずらしいビールとともに松茸を食するという、幸せなブータン初夜を迎えた。

ブムタン

THIMPHU » BUMTHANG

ティンプーから、東の都ブムタンへ向かう。幹線道路は川沿いにつくられており、車は谷を抜けて幾度となく標高3000メートル近い峠を越えた。

かつての日本の農村のような風景のなかをひたすら東へと走り、古い歴史をもつブムタンの街に到着。ティンプーでは雑多な街を堪能したので、ブムタンでは山野の中に分け入ることにしよう。

初めにオウルトレックと名付けられた2泊3日のトレッキングコースを歩くことにした。ブータンのトレッキングにはガイドの他に馬と馬使い、食事をつくるコックが同行する。たいした行程ではないのに大名行列のようで最初は気が引けたが、目印の少ない山道を進むためには、これくらいの人員を準備しないと危険なのかもしれない。

途中で巨大な松茸を2本と、木の上のほうに付着したオレンジ色のキノコをコックの男性が竹でつついて採取していた。これらはすべて今晩のおかずとなる。山道には見たことのない色のキノコが群生していて、マニアにとっては垂涎の土地だろう。キノコに関する知識を持ち合わせていない自分が恨めしい。

道は整備されておらず、足もとは泥だらけになったが、その分野性味に溢れたトレッキングとなった。可愛らしい高山植物や木の実が風に揺られ、得体の知れないキノコや苔が露に濡れている。日本で標高3000メートルといえば、森林限界を超えているが、ブータンではまだまだ森の中なのが不思議だ。

標高3230メートルのショナスという丘にテントを張ることになった。ドーム式ではない、家型の古風なテントである。あたりはぬかるんでいるのだが、うまい具合に数張りのテントが立ち、寝床には簡易ベッドが置かれた。近くの草むらで春菊のような雑草を山刀で切っているので何に使うのかと思ったら、キッチンテントの床にその草を敷き詰めている。虫除け、泥除けの役目を果たすそうで、草いきれの匂いがする素朴なキッチンが完成した。

夕食はカレーがかかった鶏肉、アスパラガスとニンジンの炒め物、茹でたジャガイモ、そして松茸のソテ

BLACK MOUNTAIN NATIONAL PARK

ー、さらに白いご飯の中にも松茸が入っていた。炊き込みご飯というわけではなく、白いご飯の中に茹でた松茸がそのまま切って混ぜられているというシンプルな料理である。どれひとつとしてまずいものがない。

テントの外では雨が降り続いている。霧のような雨から、雨粒が見える雨らしい雨、そして風をともなう風雨まで、ここではあらゆる種類の雨が降る。

翌朝9時過ぎにショナスの丘を出発した。先頭を切って歩くのは一頭の馬と馬使いである。森が深いために雨を感じることはないが、まだ雨は降り続いている。森を抜けて視界が開けた斜面をしばらく行くと、石のやぐらのようなものが置いてある丘に出た。どうやらここが標高4000メートルのピークらしい。石のやぐらは苔生していて、途方もない歳月にさらされていることを物語っている。あたりには指先ほどの小さな花が咲き乱れていた。

下りもまた泥道のなかを行き、霧に浮かび上がる人工的な建物が視界に入ると、そこがゴールのタルパリン僧院だった。雨に降られ続けたトレッキングだったが、ブータンの肥沃な国土を生み出している照葉樹林を全身で感じられる3日間となった。

タルパリン僧院は700年近く前にチベットから亡命してきたニンマ派の学僧、ロンチェン・ラプジャンパによって開かれた古い寺で、標高3600メートルという高所にある聖地である。メインの寺の中で、突き抜けるような眼差しを備えた少年僧たちと出会った。

彼らは一度寺に入ると、家族の元へ帰ることも、街に出ることもほとんどない。山からブムタンの街へ戻っても、タルパリン僧院で出会った少年僧の姿が頭から離れなかった。

市街は近年の火事で焼失してしまったがゆえに、今は建築ラッシュとなっている。空港が今年中にでき上がるということもあり、どこもかしこも工事をしていた。ブムタンもここ数年でだいぶ様変わりするに違いない。少年僧がいつか山を下りた時、彼は新しくなった街を見て何を思うだろう。未来はすぐに現在になる。山と街ではあきらかに時間の流れる速さが異なっていた。

ガンテ

BUMTHANG » GANGTEY

ブムタンからガンテへ移動中に、トンサ・ゾンに立ち寄った。ゾンというのは各県のいわば役所のような存在で、見た目は城塞そのものである。ゾンの内部も細かく部屋が分かれて、迷路のようになっている。

ポブジカの谷に位置するガンテにもゾンがあり、若い僧侶の住居も兼ねていた。ゾンの周辺は賑やかなので、初めての街や村に来た時は、ゾンの方面へ歩いていけば、だいたいその地の雰囲気を掴めることがわかってきた。

ガンテはティンプーのような都会でもなければ、ブムタンのように幾重にも重なる山が見えるわけでもない。広く開けた谷に集落が点在する片田舎といったところだろうか。

谷には小学校があって、ここには5歳から15歳までの児童が通学している。ゴとキラによる学生服に身を包んだ子供たちには、はじけるような力がみなぎっていた。朝礼はお祈りから始まり、昼休みになるとみん

上から、ブータン伝統の舞踊を見せてもらった。『アマンコラ・パロ』にて。馬たちがキャンプに必要な道具や食料を運んでくれた。トレッキング1日目のキャンプ地、ショナスの丘にて。標高は3230m。トレッキング1日目の夕食。

な元気に走り回る。バスケットボールに興じる男子たちがいるかと思えば、教室の一角に集まって何やら会合をしたり、学校の敷地を離れて道路脇の崖をよじのぼっている子供もいた。みんな自由に遊んでいて、いい。

男の子が熱中していた的当てのダーツゲームは、ブータンの国技であるアーチェリーをよりシンプルにしたような遊びで、くるくる回転する矢を直接投げる。ぼくはそれを見ながら、大人のアーチェリーも是非見てみたいとガイドのツェリンに申し出た。彼はお安いご用とばかりに、ホテルの近くの空き地でアーチェリーの腕前を披露してくれた。

まずは木製の的をふたつ持ってきて、50メートルほどの距離をとって向かい合わせに的を立てる。そして、一方からもう一方の的へと弓矢を放ち、数本の弓矢を撃ち終えると、今度は向こうの的からこちらの的へ撃っていく。これは小学校のグラウンドで子供たちが遊んでいたダーツとまったく同じやり方である。

ぼくも弓矢を撃たせてもらった。弓を引くためには結構な腕の力が必要なのだが、しかし矢を放つ瞬間には軽く指先をはじくようにしなければならず、なかなか難しい。不思議なのは、こんなにもアーチェリーが盛んな土地でありながら、狩猟などは一切禁止されていることだ。川での釣りさえも違法とされるのは、ひとえに仏教の教えが生活の根幹に存在するからである。

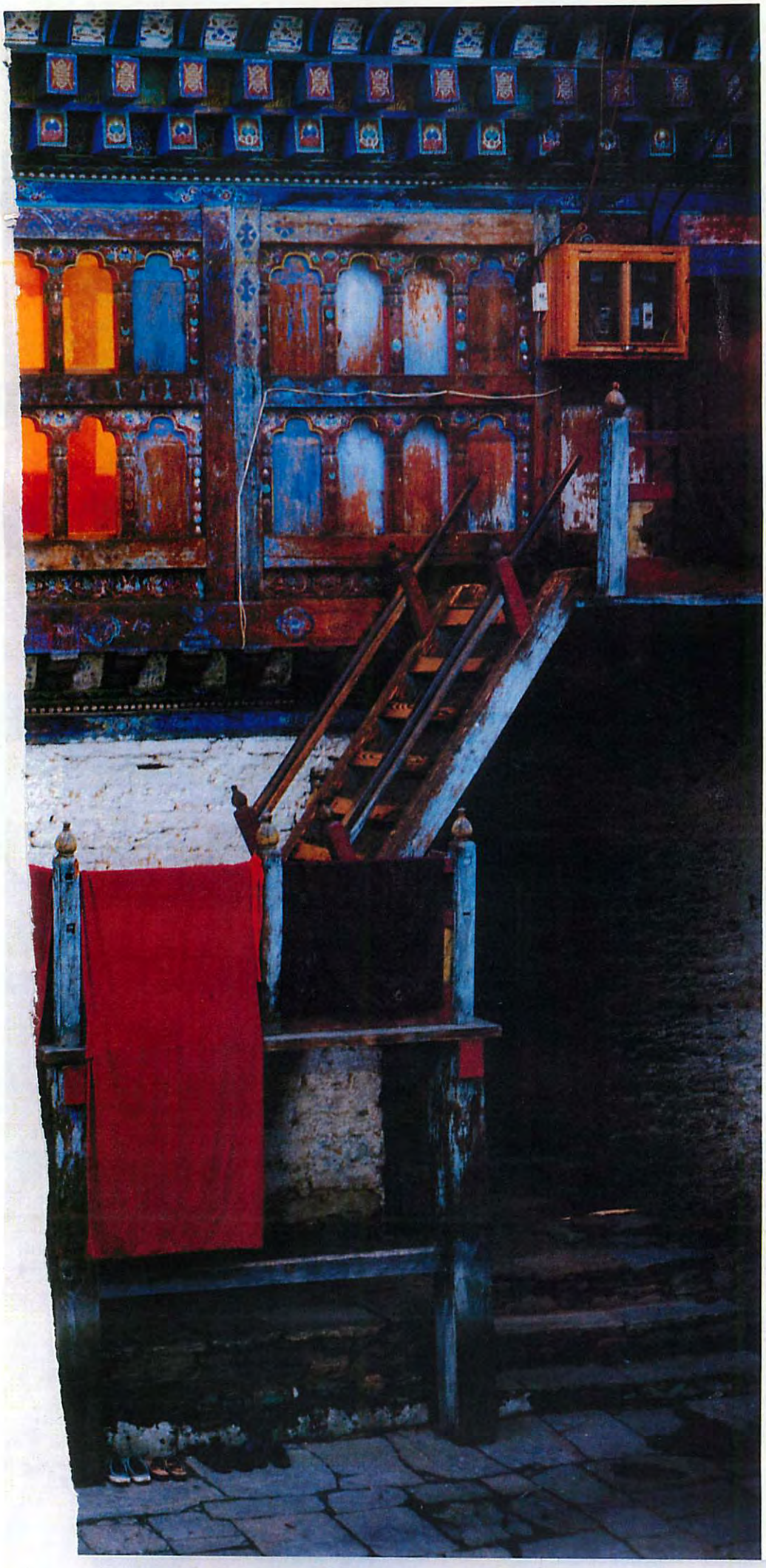
ガンテにはお店などもほとんどない。見晴らしが良くて鶴が飛来するのでバードウォッチングには最適だし、アーチェリーをする空き地には困らないが、観光客に向けたアトラクションの類は一切ない。市井の人々の暮らしがただそこにあるだけの静かな土地、それがガンテである。

ガンテで最も古い歴史をもつゲラ村を訪ねた。現在50歳というゲンチュさんの家は、4代前からこの地で暮らし、農家を続けている。さすがに4世代も前から同じ家を使っているので、家の造りも古く、すり減った木の階段は半ばクライミング状態で登らなくてはいけないほど急だった。寝床の他に、祈りの部屋があるところは他の家屋と同じで、生活のなかに宗教が溶け込んでいるのがよくわかる。ゲンチュさんの3人の子供は村を出て今は夫婦ふたりで生活をしており、他に9頭の牛を飼っている。ゲラ村にはゲンチュさんの家を含めてわずか数軒の家屋があるばかりで、しかも住んでいるのは老人のみという寒村だった。

九州ほどの広さしかないブータンにあって、ティンプーもブムタンもガンテもそれぞれ個性が際立っていた。共通しているのは、医療、美術、教育、文化といったあらゆる分野がどこかで仏教と密接に結びつき、聖俗その両方を隠すことなく柔らかく受け入れる人々が暮らしているということだ。予備知識のないまま飛び込んだブータンだったが、久々に何度も通いたくなる土地に出合ったという思いがある。彼の地を全身で理解するための旅は、まだまだ続いていくだろう。

ブータンへの一歩を踏み出したスタートの街、パロに戻った朝、遠くに雪を抱いたチョモラリが顔を出した。いつか北部のヒマラヤ山脈周辺も歩いてみたい。2度目のブータン訪問は、そう遠くないうちに実現するはずだ。

上から、標高4000m近い山を通過するオウルトレッキングコース。深い森を抜け、足跡を頼りにぬかるみを行く。今回のトレッキングのゴール地となった、タルパリン僧院。ポプジカの谷のコミュニティスクールにて。パロの雑貨店で出会った人々。



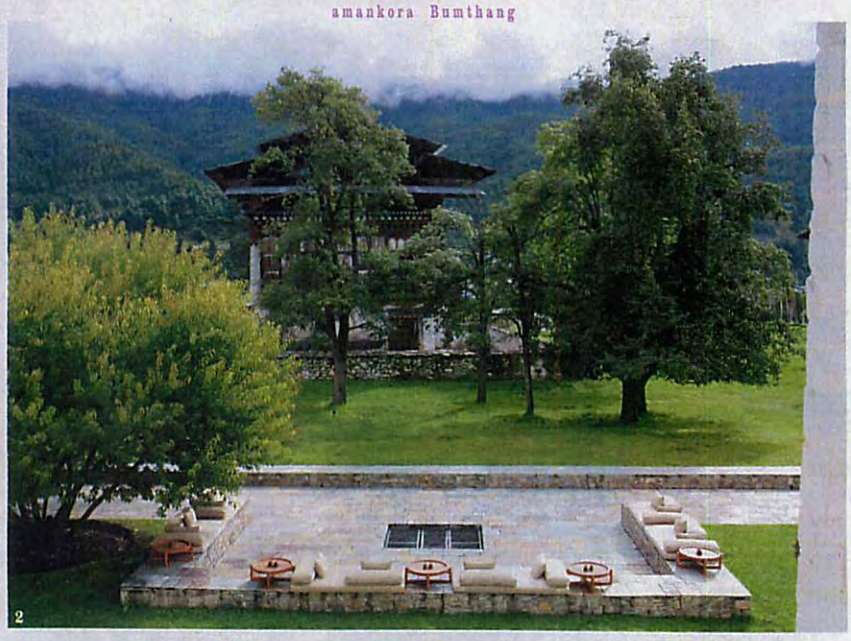
ブムタンにあるワンディチョリン宮。ブータン初代国王の父が19世紀に建設した。現在は、仏教学校となり、少年僧たちが学んでいる。

いしかわ　なおき●写真家。文筆家。1977年生まれ。2000年に『POLE TO POLEプロジェクト』に参加して北極から南極までを人力で踏破、01年に世界7大陸最高峰登頂を達成。人類学、民族学などの領域に関心をもち、旅などをテーマに作品を発表し続けている。写真集『POLAR』(リトルモア)、『NEW DIMENSION』(赤々舎)により日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞を受賞。著書『最後の冒険家』(集英社)で開高健ノンフィクション賞受賞。写真集『CORONA』(青土社)で第30回土門拳賞を受賞した。最新刊に『For Everest　ちょっと世界のてっぺんまで』(リトルモア)がある。

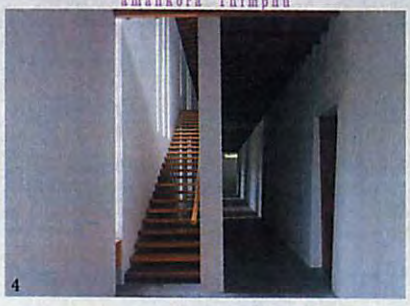
amankora Gangtey

amankora Gangtey

amankora Bumthang



amankora Thimphu



amankora Bumthang

amankora Paro

8

Where to Stay

アマンコラ amankora

Paro, Thimphu, Punakha, Gangtey, Bumthang

ブータン国内、5つの渓谷に点在するアマンコラ。ブータンで代々守り続けられてきた伝統や慣習を尊重してつくられた各ロッジでは、アマンコラ・ファミリーがホスピタリティー溢れるもてなしで迎えてくれる。パロ、ティンプー、プナカ、ガンテ、ブムタンと、それぞれの地域にて、歴史的建造物の見学、伝統文化の体験、雄大な自然を実感できるアクティビティーなど、アマンコラ独自のプログラムを用意。ダイニングルームでは、西洋料理のほか、ブータン料理やベジタリアン料理も。リビングルームにはヒマラヤ地域の書籍や写真集が置かれ、無線インターネットサービスも利用可能。

1・5_ポプジカの谷の眺望を堪能できるリビング＆ダイニングルーム。2_リビング＆ダイニングの棟からつながるコートヤード。夜には焚き火の明かりとともに。3_天気の良い日にはオープンテラスで朝食も。4_16室のスイートルームが入る2階建ての棟。6_ゆったりとした大きさのバスタブ。7_シンプルで心地よい時間を過ごせるゲストルーム。8_森林に囲まれた敷地にゲストロッジが点在。

tel.975-2331-333　fax.975-2331-999
www.amanresorts.com

取材協力・ブータン政府観光局

ブータンへのアクセス

羽田、中部、関西または成田空港から
JAL便でバンコクへ。
バンコクからドゥルク・エアに乗り継ぎ、
パロ国際空港へ。

Skyward スカイワードな旅

「スカイワードな旅」が体験できるツアーがあります。
www.jal.co.jp/intltour/jmb/skyward/

スカイワードな旅 検索